



① 遠い遠いむかしのお話です。  
 かいづかの沢村には、近木川がながれていました。海に近く、人のせだけほどもある草がたぐさんはえていたので、水鳥がよくやってきました。そのため、村には、鳥をつかまえてくらしているわかももいました。  
 この日も、あるわかもものが鳥をつかまえに、草むらに入っていました。  
 すると、何ともいえないいかおりがするのです。わかものは、草むらの間からただようかおりの方へ、そーっと、ゆっくすすんでいきま



② 草むらの間から、きれいな水がたまっているのが見えました。じっと見ると、そこには、天からまいおりた天女が、水あびをしていました。  
 そのかおりは、すぐ近くの草の方からただよってきます。そこに目をやると、キラキラとかがやく羽衣が、草の間から見えました。いいかおりは、この羽衣からのものでした。



③ そのときです。とつぜん風がふき、羽衣が空にまいりました。  
 「あっ。」  
 わかものは、羽衣を地めんギリギリのところまでつかむことができました。それは、すき通ってかるく、とてもいいかおりのするものでした。  
 「なんてきれいな羽衣なんだ。」  
 と言いながら、見とれていると  
 「かえしてください。それは、わたくしがお空をまうためにひつような羽衣なんです。」  
 と、天女はわかものにおねがいしました。



④ 水場の近くに行くと、天女は水の中で手を合わせながら  
 「それがないと、わたくしは、天の国へ帰れません。ひろってくれたおれいに、このかみかざりをさし上げますので、どうかその羽衣だけは・・・。」  
 そう言う天女の顔をよく見ると、これまでに見たことのないようなきれいなかみかざりをしています。  
 「いや、おれいなんて。」  
 と、わかものはことわろうとしましたが、天女は、頭にしていたかみかざりの八品のくしを手わたし、くしの作り方を教えました。



⑤ あまりのうつくしさに、わかものは、天女からさずかった八品のくしを たからものとして、はこに入れて土にうめ、くしのかみさまとしておいのりしました。そのときから、この土地ではくしが作られるようになったといわれています。  
 八品神社には、今もくしのかみさまにおいのりをしようとして、全国から人々がおとずれています。ぜひ、みなさんも行ってみてください。

※八品のくし

ちがうしゅるいの 八つのくしを  
 組み合わせたもの

発行者 貝塚市教育委員会  
 イラスト

貝塚高等学校 総合学科  
 十七期生 大橋 瑤生